
バカとテストと召喚獣～太陽の騎士と月光の姫～

パンデモニウム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと召喚獣〜太陽の騎士と月光の姫〜

【Nコード】

N8725X

【作者名】

パンデモニウム

【あらすじ】

振り分け試験の帰り道姫路さんと帰っていた明久にとある事故がおきて・・・とかいってもタイトルに似合わずほとんど原作寄りですよ（汗）。

まあ、処女作ですので温かい目で読んでやってください。バカとテストと召喚獣の二次創作です。明久×瑞希なので、それが嫌な人はバックしてください。あと美波とか秀吉が空気になるかもです。

プロローグ1 太陽と月の再会と物語の始まり（前書き）

処女作ですので温かい目で読んでください。
ではどうぞ

プロローグ1 太陽と月の再会と物語の始まり

〔文月学園3月末〕

吉井明久は一年に一度行われる振り分け試験を受けていた。

「（10問に1問は解ける！楽勝だってんだよ！）」

100問解けば10問、1000問解けば100問正解だ！
……そこまで答えられないけど。

「……はあ……はあ……はあ……はあ……。」

静まり返った教室で1人の少女の荒い息づかいが聞こえた。

「（うん？あれは姫路さんか。大丈夫かな？）」

ガタッ！

「姫路さん！！」

僕は姫路さんに駆け寄った。

「吉井君。席に着きなさい。君も途中退席で0点にしますよ。」

「僕もって、姫路さんは……」

「この熱では試験は無理だ。だから退席してもらおう。」

「そんな！ひどいじゃないですか！」

「……明久……君……。」

……………

瑞希Side

…うん？ここはどこでしょうか？
とりあえず起き上がってみましょうか。

「わっ！よ・・・吉井君！」

ベットの横で腕を組んで寝ている吉井君の姿がありました。

「あつ。気付いたの？姫路さん。……………え……つと……その……小学校以来だね。久しぶり。」

「あ、はいそうですね。久しぶりです。……………明久君。」

恥ずかしがりながら昔の名前で呼んでみます。

「／／／（まさかまたその名前で呼んでくれるとは……………）」

どうしたんでしょうか？明久君の顔が赤いです……………。
はっ！そういえば……………

「明久君。すみません私のせいで明久君まで0点に……………」

「気にすることないって。どうせ実力でも良くてEクラスだし。」

……………

・

明久Side

その後姫路さんと他愛のない話をしながら帰り道を歩いていた。

「あ、そうだ。姫路さんからもらったこのネックレス大切に持つて
るよ。」

そう言いながら、首にかけている十字架のネックレスをみせた。

「／／／、そうですか。わ、私も明久君からもらったリストバンドちゃんとつけてますよ。」

なぜか頬を赤くした姫路さんが袖をまくってリストバンドを僕に見せる。

「それじゃああらためて……………」。

「「よろしく（お願いします） 姫路さん（明久君）。」

そのときだった

……………１台の車がこっちにむかってきた……………
ヤバイ！！

「危ない！ 姫路さん！！」

ぼくは姫路さんをとっさの判断で突き飛ばした。

キュルルルルル！！ドガッ！！

「（ヤバイ……………死ぬ……………かも。）」

僕は空中を舞って、薄れゆく意識の中姫路さんの泣いている顔を見た。

やだなあ……こんなところで死ぬわけじゃないじゃないか……。

ドサッ！！

「あ、明久くうううん！！」

普段ではありえないほど声を張り上げた姫路さんの声を最後に僕の意識はプツリと途切れた。

プロローグ1 太陽と月の再会と物語の始まり（後書き）

どうでしたか？

感想よろしくお願いします。

ブログ2 その後の出来事 料理って怖い (前書き)

第二話です。

姫路さんを庇った明久は……。

ではどうぞ。

ブログ2 その後の出来事 料理って怖い

?????Side

病院

まさか明久が怪我をするなんてな……。

誰かを庇って怪我したあたりは明久らしいがな。

おっと、紹介が遅れたな。

俺の名前は『坂本雄二』で明久の悪友だ。

状況を説明すると、事故現場を俺が目撃して救急車を呼んで、現在に至るという訳だ。

そして今、俺の隣に明久が助けた姫路がいる。

「明久君大丈夫でしょうか……?」

「平気だろうよ。明久は頭は弱いが、体だけは丈夫だからな。」

「信頼しているんですね。明久君のこと。」

「信頼なんかじゃねーよ。ただ……このくらいで死ぬような奴じゃ鉄人から逃げられねーんだよ……。」

「それでもですよ。羨ましいです……私には隣に立つ資格なんてありませんから……。」

まあよくわからんがこいつは明久のことが好きなんだろうな。

.....

しばらくすると、手術を終えた医者がこっちに来た。

「一命は取り留めました。」

「ほつ、よかったです……。明久君が無事で……。」

「ですが……ちょっと不可解なことがあるんです。」

「どんなとこだ……？」

「ええ。……その……何と言いますか…事故の記憶が鮮明すぎなんですよ……。」

その上、相手の車は100キロ以上はでていたにもかかわらず
右手の骨折だけで済んでいますし……。」

「鮮明すぎるってどういうことですか？」

「跳ね飛ばされてから地面に叩きつけられるまでの一瞬の間にしか
見えなかったはずのもの

を見えていたと言っんですよ。例えば車のナンバーや運転手の顔な
どを……。」

そうですね……例えるなら彼の周りが静止したかのようになってい
るとき彼だけが

自由に動いていたといった感じです。その証拠に右手で車にぶつか
って右手だけで

無理やり受け身を取れていましたし……。

とっさの判断だとしても、人間の反射能力には限界がありますから

おかしいと思っ たんですよ……。」

「まあ、それ以外は何ともないんだろう?。」

「はい。右手の骨折だけですので通院で大丈夫ですよ。」

「姫路。俺も少しは手伝うから明久の世話を頼まれてくれるか?。」

「ふえ? …………… (それって合法的に明久君の家に入れるってことですか／＼)。」

「何を変な方向に考えているんだ? 早く明久を連れていくぞ。」

「ブツブツ…… はっ! は、はい今行きます!。」

その後は右手の骨折以外はいつもと通りの明久を連れて、明久のマンションへ向かった。

……………

〔明久Side〕

死んだ死んでしまったんだ……

雄二が……………

「勝手に殺すんじゃないー！。だがしかし……死にそうだぜ……。
」

僕の目の前には肉じゃが（らしき何か）を食べて仰向けに倒れた雄二の姿があった。

「ひ、姫路さん？肉じゃがの材料を教えてくださいかな？」

「え」と普通の肉じゃがにオリジナルを足す為にクロロ酢酸に塩酸

や……………」。

駄目だこの人……………。

その後雄二が幼馴染と言ってた霧島さんと呼んでしばらく特訓している間、僕は雄二の介抱をしていた。

いや、姫路さんの料理は薬品さえ入れなければおいしかったよ。

ブログ2 その後の出来事 料理って怖い (後書き)

分かりづらくてすみません。

説明はBクラス戦あたりで書くので、
それまで適当に解釈しておいてください。

次回から本編に入りたいと思います。

第1問 新たな1年の幕開け（前書き）

やっと本編入りました。

しばらくは明久の出番が無いので
あしからず。

では第1問どうぞ。

第1問 新たな1年の幕開け

〔瑞希Side〕

私は文月学園への道を走っていました。

「（なんでこういう時に限って時計が壊れてしまうのでしょうか？）」

しばらくすると校門が見えてきました。

「おそいぞー！！って姫路か？珍しいこともあるんだな。お前が遅刻など……。」

「す、すみません。時計が壊れてしまっ……。」

「まあ良い。とにかく受け取れ。」

この人は補習担当の西村先生です。……明久君曰く『鉄人』だそうです。

「なんだか今、吉井を殴らなければいけない気がしてきたんだが……。」

「き、気のせいですよ。」

……明久君は今週まで検査入院で学校に来れません。

「それより残念だったな。お前なら本来「もういいんです。」……そ

うか。」

「ええ。それに明久君と同じクラスになれましたし。」

「学校的には間違っていたが、人間としては吉井は最高の判断をしたと思うぞ。」

「はい。明久君はバカですけど優しいですから。」

私は顔を赤らめながら答えました。

・・・・・・・・・・・・・・・・

くAクラスく

す、すごい教室ですね……。

リクライニングシートにパソコン、お菓子までありますよ……。

あつ！翔子ちゃんが代表みたいですな。

私が手を振ると振り返してくれました。

……ですが、この周りの『やっぱりか……』みたいな視線はなんなのでしょう？

まあ、いつまでもここに留まっても居られないのでFクラスに向かいます。

くFクラスく

す、すごい教室ですね……………Aクラスとは違う意味で……………。

例えるなら『廃屋』ですかね…。

現実逃避してもしようがないので意を決して扉を開きます。

く雄二Sideく

さて…………と。

姫路が来る前にやったほうがやりやすいな…………。

「みんな、聞いてくれ！俺は代表の坂本だ。……………代表としてはなく、

クラスメイトとしての頼みを聞いてほしい……………」

Aクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う!!」

それから俺は振り分け試験で起こったこと、
その後の事故で姫路を明久が庇ったこと、
そして明久の想いを語り説得した（主に拳で）。

肉体言語？ソナモノツカッテナイヨ？？

『O・H・A・N・A・S・H・I』ダゾ？？

何故だか知らんが、『明久と姫路をくつつけよう!!』みたいな集団
が出来ちまったが……………。

ガラッ！！

「お、遅れてすみません！」

お、ちょうど良い所に来たな。

今年は面白い年になりそうだ……。

第1問 新たな1年の幕開け（後書き）

どうでしたか？

しばらくは明久不在で書きますが、その代わりに姫路さんを原作以上に活躍させたいと思います。

第2問 宣戦布告（前書き）

雄二視点も入れていきたいと思います。

： そうしないとDクラス戦は、姫路さんの

回復試験の描写だけになってしまうので……。

では第2問どうぞ。

第2問 宣戦布告

（瑞希Side）

な、何でしょうか……？この盛り上がり様は……。

「お前ら…本人のご登場だ！」

何故だか分かりませんが坂本君がそう言いました。

「一体これは……………」

「……………ようこそFクラスへ！我らがプリンセス！」
「……………」

……………な、何なんですか？」

「うん？ああ、気にするな。試召戦争をやるから士気が上がってるだけだ。」

「そ、そうですね。」

「（こいつ明久ぐらい騙されやすいんじゃないか……？）」

（雄二Side）

「それじゃあ、まだみんなが不安かもしれないから
勝てる要素を紹介しよう。」

…………… 康太。 姫路のスカートの中を覗こうとしてないで前に出て
こい。」

「……………！！（ブンブン）」

「は、はわっ！」

「こいつは、土屋康太。」

またの名を『寡黙なる性識者（ムツツリ―ニ）』だ！」

「……………！！（ブンブン）」

「バ、バカな奴がそうだと言うのか……………？」

「だが、あの否定できない畳のあとを必死で隠しているぞ。」

「ああ、ムツツリの名に恥じない姿だ。」

姫路だけポカンとしているな。
まあ知らなくて良いだろう。

「木下秀吉だっているし、俺も当然全力を尽くす。」

「なあ、坂本って小学生の時は神童って呼ばれていたよな？」

「それならいけるんじゃない……………」

「それにな……………」

「吉井明久と姫路瑞希がいる!!!」

「「「「「うおおおおお!!!」」」」」

Fクラスが一気に歓声につつまれる。

「な?このクラスなら勝てるだろ!？」

「ああ、負ける気がしねえ!」

「俺たちなら勝てる!!」

「まずは俺たちの力を見せつけるためにDクラスを征服したい。
俺たちの目的は何だ!？」

「「「「「我がFFF団が認める1組のカップルのために!!」」」」」

「ならば、ペンを持って!!立ちふさがる敵をなぎ倒せ!!出撃の準備だ!」

「「「「「おおおおお!!」」」」」

「よし。誰か宣戦布告に逝って来い!」

「俺が逝って来よう。会長としての義務がある。」

「すまないな、須川。危なくなったらすぐに帰ってくるんだぞ。」

「おう!」

「数分後」

「……………これで……………良かったん……………だよな……………。」「

息絶えそつだがどこか誇らしげな須川がDクラスの教室の前に倒れていた。

第2問 宣戦布告（後書き）

今回はDクラス戦です。

いままで出番のなかったアノ人達が……

感想よろしくお願いします！

第3問 VSDクラス ～前編～（前書き）

Dクラス戦開始です。

特に書くこともないので第3問とつぞぞ～

第3問 VSDクラス 〈前編〉

〈秀吉Side〉

15:00

「戦争開始だ！前線部隊は出撃しろ！」

「「「「「おおおおおおお。」」」」」

雄二の掛け声と共にワシらは勢いよくFクラスから飛び出し、新校舎の一番端にあるDクラスをめがけて全力疾走した。

今回の試召戦争で重要なのは開戦直後の渡り廊下の制圧じゃ。

両クラス共に校舎の端にあるゆえ、ちょうどここでぶつかるのじゃ。

……そしてここを制することは、戦力が圧倒的に少ないFクラスにとっては死活問題になる……………

……と雄二が言っておったのじゃ。

ワシがそんな難しいこと分かる訳ないじゃろ？

一応Fクラスじゃかな………

まあとにかくそろそろDクラスの連中がみえてきたのじゃ。

「いたぞ！Fクラスだ！！」

「Fクラス木下秀吉、試験^{サモン}召喚じゃ！」

数学

『Fクラス木下秀吉 & a m p ; FクラスA
DクラスA

V
S

76点

62点

116点

「できるだけ2対1に持ち込むのじゃ！
一桁になってしまった者は後退するのじゃぞ！」

＼美波Side＼

15：30

結構押されてきたわね……………

「みんな、総員突撃よ！戦死しそうな人を助けながら
戦線を維持するよに！」

「「「おっつ！」「」「」

ダダダダダッ！！

「木下！助けに来たわよ。試験^{サモン}召喚。」

数学

『Fクラス島田美波

152点
』

「Bクラス並みの成績だと！？」

「くっ！あいつを取り囲め！それ以外はザコだ。」

「ささんのじゃ！」

数学

『Fクラス木下秀吉

「ちょっと木下！アンタボロボロじゃない！？」

「構わんのじゃ。ワシの部隊が後退するまでは踏ん張って見せようぞ！」

「しょうがないわね。戦死してから後悔しても遅いわよ！」

「がってん承知じゃ！」

く雄二Sideく

戦局は思ったより良いな。

あと少しだ……あと少しで俺たちの勝利が確定する。

「あと少ししたら俺たち本隊も出撃するぞ！」

＼Dクラス平賀Side＼

くそっ！なんでFクラス相手にここまで押されているんだ！

「俺たちも出撃する！戦力を出し惜しみするな！
なめてかかると足元をすくわれるぞ！」

「「「「「おおー！！」」」」」

美波Side

「おねーさまー!!」

ひっ! この声は……

「み、美晴……。」

「お姉さま。私は悲しいです。愛し合っている者同士が戦うなんて……!」

「私は愛してないわよ!! 木下、手伝って! 試獣召喚!」
「試獣召喚じゃ!」

「しょうがないですね。試獣召喚ですわ!」

科学

『Fクラス島田美波 & 木下秀吉

清水美晴

VS

56点

64点

132点

「って……ウチの苦手な科学じゃない!」

「早く私のものになってくださいお姉さま!!」

「ウチは、アンタみたいなやつものにはならないわよ！」

「ワシも戦っておるのになんなのじゃ…………この疎外感は…………。」

第3問 VSDクラス 前編 (後書き)

次回でDクラス戦は終わりです。

Dクラス戦のあとは少し原作を外れてCクラス戦をやりたいと思います。

感想の方もよろしく願います。

第4問 v s Dクラス 〱後編〱（前書き）

今日は部活で久しぶりに力尽きましたよ……。

いつもよりハードな内容だったので……。

『何部に入っているの？』ですか？

……剣道部ですよ。

あんな重い武装（笑）をして、顧問の先生から一言

『5時半まで地稽古（練習試合みたいなもの）やってください。（その時の時刻は4時20分でした。）あ、そうそう休憩は取りませんからね。』

いやいやいや！無いでしょww

いくら寒いとは言え、剣道って見かけ以上に動きますから

最後の方なんて視界が霞んで死ぬかと思いましたよ。

いやあゝ書き溜めてなかったら今日は更新できないところでしたよ……。

では第4問どうぞ。

第4問 VSDクラス 〱後編〱

〱秀吉Side〱

16:00

「お前ら！俺たちが来るまで持ちこたえるんだ！！」

あの声は雄二じゃな！

「Fクラス代表はあそこだ！何としても討ち取るんだ！！」

あやつは確か…Dクラス代表の平賀じゃな。

どうやらDクラスはここで決着をつけるつもりのようにゃ。

「下校中の生徒に紛れながら勝負をしかける！」

今のフィールドは現代国語……

「やるしかないのう……」

ワシはそう考えた直後、平賀に向かって駆け出した。

（瑞希Side）

坂本君の作戦は『回復試験をひたすら受け、ある程度回復したらAクラス生徒のフリをして、俺の声が聞こえたらDクラスに奇襲をかける』でした……。

あまり気が進まないのですが、作戦ですから仕方ありませんね。

「下校中の生徒に紛れながら勝負をしかける！」

坂本君の声が聞こえました。

という事は私の出番ですか…。

「^{サモン}試獣召喚！」

現代国語

『Fクラス 姫路瑞希

382点
』

「Fクラス姫路瑞希がそのDクラス生徒に挑みます！」

「なっ！なんだと……。」

「なぜ去年の学年次席がこんなに……。」

「というか、Fクラスって言ってなかったか……。」

いろいろ驚いていますが気にしている暇はありません。

「す、すみませえん……！」

私は召喚獣に大剣を一振りさせるとその軌道にいた2、3体の召喚獣を

巻き込み一瞬で……

『Dクラス 3名

0点×3』

消し飛んじやいました…………。

（秀吉Side）

「見つけたのじゃ平賀！現代国語で「Dクラス玉野が受けます試験^サ召喚^{モン}！」

…………試験召喚^{サモン}じゃ！」

現代国語

『Fクラス 木下秀吉

Dクラス 玉野

VS

89点

122点

「残念だったね。でも君じゃあ例え俺と戦っても勝つのは無理だ。だいたい、いくらFクラスの団結力が良くても、代表を倒せなければ意味は無い。君らの代表は何を考えているんだい？」

「そうじゃの……ワシらFクラスのシンボルともいうべき2人のため……
ということじゃな。」

「Fクラスって本当に面白いクラスじゃないか。その2人の顔が見てみたいよ。」

「安心せい。そろそろその2人の片割れが来るころじゃ。」

「だ、代表！！1人化け物みたいな点数の奴が現われて後ろの方が混乱してやがる！」

「な、なんだと……。」

「どうやら来たようじゃな。平賀……確かにワシではおぬしを倒せぬ……。
じゃが、今後ろにおるワシらFクラスが誇る2人のうちの1人ならどうじゃ？」

「さっきから何を言ってるんだい……？き

「Fクラス姫路瑞希Dクラス代表に現代国語で挑みます。試獣召喚^{サモン}

「！」

み……………は？」

「ごめんなさい！」

現代国語

『Dクラス代表 平賀源二

0点
』

「戦争終結！！」

「そ、そんな……。」「

」雄二Side」

」戦後対談」

俺たちはDクラスで戦後対談をしていた。
本来なら設備を奪い取って、悔しがっているザマを拝んでやりたいんだが……

さてと……明久は明日戻ってくるんだっ
たな…。

この戦争の発端が………。

第4問 VSDクラス 〱後編〱（後書き）

次回から明久復活…かな？

多分Bクラス戦まで出番少ないと思いますが
どうか付き合ってやってください。

感想お待ちしております。

第5問 僕と真実とパエリア（前書き）

実は今週から文化祭の準備で忙しくなります。

1日1回更新できるかできないかなので

すみませんがよろしくです。

それでは第5問どうぞ。

第5問 僕と真実とパエリア

く瑞希Sideく

く土曜日・病院く

今日は明久君が検査を終え戻って来る日です。

そして今、坂本君と翔子ちゃんと一緒に明久君を迎えに病院に来ました。

「…明久君、腕は痛くありませんか？」

「平気、平気、もうすっかり良くなったし。」

安心しました………そういえば明久君に聞きたいことがあったんです。

「（翔子ちゃん。明久君に話があるので席を外してもらえませんか？）」

「（………わかった。）」

「……雄二これから出かけたい所がある。」

「なんで俺が……まあ、仕方ねえか（チラッ）。」

そう言いながらこちらを見て坂本君は納得しました。

（明久Side）

姫路さんが話つてなんだろう？

「明久君に聞きたいことがあるんです。」

「うん。」

何のことだろう？

「明久君は前から坂本君と試召戦争の話をしていたんですね……？」

「うんそうだけど……。」

そうだけど姫路さんのためだなんて口が裂けても言えない……、
そうしたら気をつかわせてしまうから……。

「そ、そのきっかけは何だったんですか？」

「あまりにも設備が「嘘ですね。」あまりにもってまだ何も言っていないよ！」

「明久君は嘘をつくのが下手すぎるんですよ。……本当の理由は何ですか？」

うっ！こういう時の姫路さんは結構鋭いからな……。

仕方が無い……こうなったら話すまで姫路さんはご機嫌斜めだろう……。

そうなるぐらいなら潔く全てを暴露してしまえ！

「実は……………ひ、姫路さんのためにと雄二に相談したのが始まりかな…。」

まあ、もともと雄二もやりたがってたみたいだけど。」

「……………（／／／）。」

な、何なんだろうこの気まずさは…………。

まるで付き合ったばかりのカップルみたいじゃないか…………。

「あああああああ！やっぱダメ！さっきの無し！お願い姫路さん！さっきの聞かなかったことに…………。」

「嫌ですよ。しっかり聞いちゃいました。忘れて欲しかったら

私に明久君のパエリア食べさせてください。坂本君から美味しいって聞いたんですよ？」

そう言いながら姫路さんは僕の家の方方向に走り出した。

まあ、これで姫路さんに気をつかわせないで済むなら安いものだろう。

「ちょっと待ってよ姫路さん！おいてかないで！」

僕も姫路さんを追って駆け出した。

く瑞希Sideく

「「いただきます！」」

モグモグ……………

はあ……

「どうしたの姫路さん。もしかして口に合わなかった？」

「……いえ……そうじゃないんですけど……。」

美味しすぎて落ち込んでいるんですよ……。

「」「ごちそうさまでした！」「」

そろそろ帰らないと心配かけちゃいますね……。

「それじゃあもう遅いので帰りますね。」

「うん。それじゃあまた来週会おうね。」

「はいっ！」

第5問 僕と真実とパエリア（後書き）

次回はCクラス戦をやりたいと思います。

復活した明久は何をするのか……。

感想よろしくお願いします。

第6問 VSCクラス 前編 (前書き)

なんとか今日中にもう一話仕上がりました……。

やっぱ1日1話の方が書き溜めやすそうだから

そうしようかな……。

そんなことより第6問どうぞ。

第6問 v s c クラス 前編

雄 Side

「今回の相手はcクラスだ！今日の午後開戦と伝えておいたから
しつかり昼食喰っとけよ。」

「「「「おうつ！」「」「」」

.....

午前の授業が終わり、屋上で昼飯を喰うことになった。

「明久よ。今日こそちゃんとしたものを持って来てるんじゃないかな
？」

「いや。いつもちゃんとしたのを食べてるよ？」

「あれは食事と言えるのかの……。」「

「……………舐める飲むが正解。」「

そういえばこいつらは姫路と明久の関係をよく知らなかったんだよな。

「はい。明久君今日のお弁当作ってきましたよ。」「

「うん。いつも昼飯作ってもらって悪いね。」「

「気にしないでいいですよ。私の料理の特訓を手伝ってもらっているお礼ですよ。」「

一瞬の沈黙……………

[illegible]

くっ！鼓膜が破れるかと思ったぞ……

「ちよ、ちよっといっ
たいいつからなのよ！」

「去年にそんな素振りなどなかったはずじゃぞ！」

「……このおれが察知できなかったと……！」

「いつって春休みからだけど……。」

「はい明久君。あ〜ん。」

「うん。あゝん。」

ちなみにこれは腕を折つた時に姫路に食べさせてもらっていた時の癖らしい。

[illegible]

くそっ！第二波がきやがった！

鼓膜が…… Y A・B U・R E・R U！！

俺の意識が薄れていく中見たのは、

ピンク色の空間を作りだした明久と姫路だった……………ガクツ

久Side)

「開戦だ！！」

「
「
「
「
「
おおお
！！
「
「
「
「

ダダダダダッ！！

雄二の掛け声と共にクラスメイトが駆け出して行った。

…僕はどうしたかって？

……………このストライカー？5をつかって「使っんじゃないっ！」

な、なんだと地の文にツツコミを仕掛けるなんて……………。

「まったく……………今日はお前無しで決着がつくはずだ。
というか明久の戦法じゃ複数対複数はできねえだろうが。」

ま、それもそうだね。観察処分者であるが故の操作技術による
ヒット&アウェイ……………これこそが僕の本領なんだけどね。

しかしこの戦法は基本1対1向けだ。複数になると動きづらくなり、
点数の少ない僕にとっては死活問題なんだ。

とにかくテストを受けないとね。途中退席で僕も全教科0点だし……。

く秀吉Sideく

「サモン試獣召喚じゃ！」

古典

『Fクラス 木下秀吉

182点

VS

CクラスA

CクラスB

142点

138点

『

「ひとりBクラス並みの奴がいるぞー！」

「ほかは構うなあいつを……」

キュボツ！

『CクラスC

0点
』

……え？」

数学

『Fクラス 姫路瑞希

421点
』

「……はぁ……はぁ……お、遅れてすみません。」

「な、Aクラス並みだと！？」

「しかも腕輪持ちよ！」

「無理だ！かなうわけねえよ！」

姫路もちょうど到着したみたいじゃな。

「お主ら！総員突撃じゃ！」

「が、頑張ってください。」

「「「おおおおお！！」「」」

数学

『Fクラス 姫路瑞希

木下秀吉

Fクラス15名

421点

78点

平均70×15

VS

Cクラス 12名

平均140×12

』

第6問 VSCクラス 前編（後書き）

『明久の出番が少ないじゃん』という声が上がってきそうですから先に言っておきます……。

第1問の前書きに

『しばらく（ここ重要！）明久の出番が無いのであしからずと書いたはずです。』

……………何かすみませんでした。

だ、大丈夫ですよ！ちゃんとBクラス戦でいやというほど根本をボコボコにしていますから。

根「ちょ、俺の人権は……………」

バキッ！

ぶべらはっ！」

黙れ根本！明瑞^{カス}の邪魔をする奴はただじゃおかねーんだよ！

根「…ま…まだ…何もしてねえのに……………」

感想お待ちしています！

第7問 VSCクラス 後編

美波 Side

2F 東側階段

「さあ。作戦開始よ！」

「「「おおおお!!」「」「」

ウチに与えられた作戦は『Cクラスを階段から襲撃……頃合いを見計らって、撤退しろ』
って坂本が言ってたわ。

「なっ！なぜここにFクラスが……。」

「試獣召喚！^{サモン}」

数学

『Fクラス 島田美波

Fクラス×10名

182点

平均70点×10

CクラスA

CクラスB

142点

139点

」

「くそっ！俺たちだけじゃこの数を相手にするのは無理だ早く増援を……。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

（Cクラス小山Side）

「大変だ！階段側からFクラスが来やがった！」

「人数は？」

「10人近くで1人だけBクラス並みの奴が居やがる！」

「大した事ないじゃない、こんな程度で奇襲のつもりかしら。
7、8人居れば十分よ。連れて行きなさい。」

「ああ、分かった。」

Dクラスに勝ったからどんなものかと思ったけど大したことないの

ね。

まあ、後は姫路瑞希を倒せば私たちの勝利は確実ね。

「代表!!」

「今度は何!？」

「Fクラスが撤退しているんだ!」

「追撃よ!!補充で5、6人連れっけて!!その勢いでFクラスまで攻め入りなさい!」

「了解!!」

いい度胸じゃない……。こうなったら完膚なきまで叩きのめしてやるわ!!

.....

く美波Sideく

そろそろ人数が少なくなってきたわね。

「総員退避よ!!」

ウチたちは全速力で2Fを目指して走った。

「追えっ！Fクラスを逃がすな！！」

……作戦通りね。今ちょうど2Fに降りて階段前……

「総員反転！反撃開始よ！！」

「「「おうつ！」「」」

……………
（須川Side）

「総員反転！反撃開始よ！！」

そう叫んだ島田の声が聞こえた。

俺たちの出番か……………

「お前ら！この戦争は誰のためにある！？」

「「「吉井と姫路瑞希嬢のために！！！！」」」

「ちがあああああう！！2人のラブラブっぷりを全校生徒にみせつけるためだ！！」

「「「はっ！！」」」

「ようやく気付いたか！我々には勝利という二文字しか無い！！存分に戦え！！」

「「「おおおおおお！！！！！！」」」

……おっと、作戦内容を語るのを忘れていたな……。

『島田の部隊が反転したら4Fから奇襲、Cクラスを階段でとじこめる』

以上だ！

「^{サモン}試獣召喚！！」

「「「^{サモン}試獣召喚！！！！」」」

『FFF団 須川亮 FFF団×10名

Fクラス 島田

美波 Fクラス×6名

&

71点

平均70×10

162

点 平均60点×6

VS

Cクラス×15名

平均140×15

『

悪いがここで足止めさせてもらおう!!

.....

＼Cクラス NoSide＼

「Fクラスに伏兵が……」

「何で突破できないのよ!!」

「数が多い上に挟み撃ちじゃ敵わないだろ!」

「だったら増援!!」

「そのほとんどが姫路瑞希を抑え込むのに使っているんだよ!」

「ああ、もう鬱陶しいわね!!」

「大変だ!!次々と防衛ラインを突っ切って来る奴が……。」

「あなたもさっきから黙ってられないの!!」

ガラッ！

「誰よ！こんな時に！言いたいことがあるなら早く言いなさい！！」

小山はイラついてたせいか相手を見ずに言った。
しかし怒鳴り散らした人物は……

「……………なら言う。Fクラス土屋康太。近衛部隊全員に保健体育で勝負する。」

……………^{サモン}試獣召喚。」

保健体育

『Fクラス 土屋康太

442点

V S

Cクラス×10名

平均130点×10

』

「……………加速。」

彼がそう呟くと…………

保健体育

『Fクラス 土屋康太

442点

VS

Cクラス×10名

0点×10

一瞬で10名余りを戦死させた。

「そ、そんな…………。」

ガラッ！

「Fクラス姫路瑞希、Cクラス代表に挑みます。試獣^{サモン}召喚です。」

数学

『Fクラス 姫路瑞希

VS

Cクラス代表 小山友香

262点

0点

『

ダメージは負っていた瑞希だったがが勝つには十分すぎた。

「戦争終結!!」

鉄人の大声と共に戦争が幕を閉じた……。

第7問　VSCクラス　〈後編〉（後書き）

今回は長かった…………。

Cクラス戦の作戦内容は授業中にぱっと思いついたものなので正直不安です。

………… 明久が空気だったなような？

………… べ、別に忘れてたわけじゃないからね！

放課後のラブレターというイベントがあるから
今回は控えさせてもらっただけです…。

さて………… 次回はさっき書いた通りラブレターの所です。
どうやってイチャつかせようかな…………。

第8問 不幸の手紙、事実を混ぜると嘘でも現実味が出てくるよね（前書き）

ちよつと今回は作者が暴走しました。

みなさん。ブラックじゃ足りません。豆ごと飲んでください。

とりあえず第8問どうぞ

第8問 不幸の手紙、事実を混ぜると嘘でも現実味が出てくるよね、

、雄二Side、

、戦後対談、

さあCクラスに勝った訳だが……

Cクラスに攻め込んだ理由は2つある。

1つ目はBクラスの根本と付き合っている小山が何かしでかす前に無力化させる事。

2つ目はAクラスに勝った後のことだ……。

勝ったクラスは負けたクラスと設備が交換できる。

つまり、俺たちが勝ったら翔子があのかFクラス（かび臭い廃屋）で授業を受けなければいけないという事だ。

……………それだけは許せねえ。

ほとんど私利私欲だって？

HA！HA！HA！

……悪いか？

「私は認めないわよ！！こんなクズ相手に負けたなんて！」

はあ………さっきからこの調子なんだよな……。

「認めようが認めまいがどうでも良い。とにかく設備は交換する。」

「くっ！なんで私があんなごみ溜めの教室なんかに……。」

こんな調子の小山をほっという俺たちはさっさと設備を入れ替えた。

・ ・ ・ ・ ・
　　＼ 明久 Side ＼

　　＼ 放課後・帰り道 ＼

「あ、教科書忘れちゃた。」

「バカかお前は、ついていかねえからな。一人で寂しく逝って来い。」

「いろいろツツコミたいけど、とりあえずこの薄情者!」

まあこいつの薄情さは今に始まったことじゃないからいいけど…。

・ ・ ・ ・ ・
　　＼ Fクラス（Cクラス） ＼

「ただいま！新しい我が家よ！」

誰もいない教室に向かって言ってみる。

……… って姫路さんがいたのか。

なんか熱心に書いているけどどうしたんだろう？

「何書いてるの？姫路さん。」

「ふえ？……わわっ！あ、明久君！？」

そんな驚くようなことしたっけな……？

それよりさっき落ちたこの手紙は何だろう？

『あなたのことが好きです』

………まるでラブレターじゃないか………。

『認める。これが現実だ。』

黙れ。僕の中の悪魔！考えないようにしているのに……。

僕は姫路さんにその手紙を渡しながら1言。

「変わった不幸の手紙だね。」

『認めない気だ！』

「あの……それはものすごく困る勘違いなんですけど……。」

「勘違いなんかじゃない！現に今僕がこんなにも不幸になってるじゃないか。」

『無理矢理だなオイ！』

「あの……とにかく落ち着いてください。」

そう言いながら姫路さんは僕の手を両手で握り上目づかいで言った。

うつっ！そうされるとなにも抵抗できないじゃないか／＼

相手は誰だろう？さりげなくカマをかけてみようかな？

「そいつのどこが良いんだい？外見なんてクソみたいだと思うけど。」

「いえ外見じゃなくて……あ、もちろん外見も好きですよ。女装が似合ってしまうぐらいとてもかわいいんです。」

女装が似合う……ね。秀吉がムツツリー二かな？

「もしかして中身も？」

「……はい。」

姫路さんは恥ずかしそうに答える。

『もう諦めろ。こいつは本気だ。』

認めてたまるか！！

「確かに肝臓とか丈夫そうだね。」

「いえ……。性格の話なんですけど……。」

「どんなとこ？」

「優しくていつも明るくて元気で……そしていざとなると男らしくて……」

ずっと私の憧れだったんです。」

『1つもかすらなかったな。』

くっ！僕はもう生きていける気がしない！！
こうなったらこの窓から飛び降りて……。

「やめてください！明久君！」

姫路さんが窓から飛び降りようとした僕の腰に抱きつく。

「だめだ！僕はもう生きていける気がしないんだ！」

「そ、そんな………そんなに明久君にとって苦痛なんですか……。
……やっぱりわたしも生きていける気がしません……。」

なんでそんなに落ち込んだ顔をするんだろう？

「駄目だ！姫路さん！！」

「ひゃあ！！」

今度は姫路さんが窓から飛び降りようとしたのを僕が後ろから抱きついて止める。

あ、ふわっと甘い匂いが／＼

ガラッ

OK？今の状況を説明しよう。

まずは客観的に見るんだ。

- ・放課後、無人の教室で2人きり
- ・僕が後ろから抱きついている状態
- ・2人とも息を荒げている
- ・さっきの『駄目だ！姫路さん！！』『ひゃあ！！』という会話が
決め手。

…………この状況が指す意味は……。

「す、すまねえ！！だ、誰かいるなんて知らなくて！」

「ま、待ってよ須川君！！誤解なんだあああああああ！！！」

「大丈夫だ吉井！俺たちが教室に誰１人入らせねえから存分にやってくれ！」

「だから誤解だって！ほら姫路さんもなにか言つてよ。」

「…………あ、明久君とあんなことやそんなことを／＼／」

くっ！駄目だ処理落ちしている！

こっとなったら……

「いくよ！姫路さん！！！」

「ふえ？……わ、私されちゃうんですね……。嬉しいですけどその……心の準備というものが……。」

「ああ、もういいから！走るからつかまってね！」

僕は姫路さんをお姫様抱っこすると同時に教室を出て全力で走る。

「吉井があっちにいったぞ！」

「追え！そしてさっきの写真とらせろやあああ！」

くそっ！もう追ってきたのか！

なんか下校途中の生徒が数名いるけど知ったことか！

その調子で学園を出てしばらくすると僕は姫路さんを降ろした。

「もう大丈夫？」

「ええ。落ち着きました／＼／」

どうやらさっきのことを思い出してしまったのか顔が赤い。

まあ、お姫様抱っこしてた時の危ない顔よりはマシだけども……。

「じゃ、じゃあまた明日ね！」

「あ、はい。さようならです。」

・・・・・・・・・・・・・・・・

（瑞希Side）

あ、明久君に抱きつかれちゃいました／＼

とても暖かくて良い匂いでした／＼

はあ……。1人で言っただけなんだか虚しいです。

こんなにも明久君を欲してるのになんで気付いてくれないのでしょうか……。

あ、そういえばこのネックレス明久君が怪我してからずっと預かりっぱなしでした……。

第8問 不幸の手紙、事実を混ぜると嘘でも現実味が出てくるよね（後書き）

やっちゃったZE！

……瑞希がどんどん変態に……。

げ、原作もこんな感じだから大丈夫だよね？

不満があつたら心の内側にしまいこんでくださいww

今回は原作に戻ってBクラス戦です。

やっと明久の見せ場がつかれるぞおおおお！！！！

次回もよろしくお願いします。

第9問 V S B クラス戦 いや…… V S 根本戦かな？ (前書き)

特に書くことは無いので第9問とつづ

第9問　VS Bクラス戦～いや…… VS 根本戦かな？～

～明久Side～

……姫路さんの様子が変なんだ。

現在15時。開戦から1時間がつけど姫路さんは防戦一方だ。

相手の代表はあの悪高き根本君だ。

……姫路さんが脅されている可能性が高い。

「……姫路さん。調子悪そうだから無理しないで退がっててくれな
いかな？」

「すつ、すみません……。」

遠慮しがちに姫路さんはFクラス方向に走って行った。

……姫路さんには悪いけど後をつけさせてもらおう。

[illegible]

ハッハッハ！！傑作だなオイｗｗ

学年次席がクス観察処分者を好きになるなんてな！

俺が勝つためにはどんな手段でもつかってやるよ！！

たとえそれが脅迫だとしてもなあ……！！

お？姫路がこっちに歩いてきたな。
……ちよいとからかってやる

かww

「こんなところでどうしたんだい？学年次席でFクラス所属の姫路さん？」

.....
く瑞希Sideく

どうしたじゃありませんよ！

人の想いを利用して何が楽しいんですか！

「あー、怖い怖いww代表の俺がこんな所にいたらどこかの学年次席に
倒されちゃうなあ.....でも心優しい学年次席ちゃんはラブレター
1枚で
見逃してくれちゃうよねww」

内心ムカツとしながら無視します。

「なになに『あなたのことが好きです』プツ…クツクツ…ハツハツハツハ！
ベタすぎるだろww」

………
〈明久Side〉

駄目だ！ここで僕がでたら姫路さんの書いたあの手紙がばらまかれてしまう！

何か策はないのか！！

無理だ！僕の脳じゃ策なんて練れない！

………どうすればいいんだ！！

今にも泣きだしそうな姫路さんの顔を見上げて（僕は下の階の踊り場から見ている）

自分の無力さに情けなくなり視線を落とそうとしたその時だった。

……姫路さんのスカートの中が偶然見えてしまった。

ドクン

鼻血ではない何かが体の底から湧きあがってくる……………

ドクン……ドクン

駄目だ！あの時と同じ事を引き起こしてはいけない！！

ドクン…ドクン…ドクン

だが……止まらない……『飲み込まれてしまえ』という意思に逆
らえない。

ドクンドクンドクンドクンドクン

意識を1瞬だけ手放してしまう……

……。

僕はうなだれた体を起こし、一言つぶやいた……

「ちっど.....とりあえず君のすべてを壊してあげようか。」

根本クン？

その眼は赤く染まり、普段の明久にない異常な程の落ち着きと.....

.....
冷酷さがあつた。

第9問 V S Bクラス戦い…… V S 根本戦かな？（後書き）

次回は根本^{クス}の命日です。

根「ちょっと待て！おれは死なねえぞ！」

……死ぬよ？だってきれいに死亡フラグ立てたもん。

明久の異変の正体については次回の後書き辺りに書きたいと思います。

薄々分かってる人もいるんじゃないですか？

ヒントは『緋弾のARIA』です。

第10問 明久の本気（前書き）

うん…。

原作のヒステリアモードと少し違う部分がありますが
そこは何とか許してください。

では第10問どうぞ

第10問 明久の本気

く雄二Sideく

ガラッ

「明久か。サボリならチヨキで」話がある。」「……無視か……。」

「みんなを退がらせろ。僕が1人でBクラスを落とす。」

なにトチ狂っているんだコイツは……

「できるわけないだろ。」

「やってやるさ。」

異様なまでの自信だな……いつもと雰囲気が違うし。
騙されたと思って任せてみるか……。

「失敗は許さねえぞ。」

「杞憂だよ。」

「ならお前の口から言っていこい。」

「分かったよ。……勝利の栄光を君に。」

明久は人指し指で何かを撃つようなマネをしながらウィンクした。

………気持ち悪いぞ。

・ ・ ・ ・ ・

〔 N O S i d e 〕

「全部隊に通達。総員撤退！！」

明久がそう叫ぶと同時にFクラスは撤退していく。

………明久を除く。

「サモン試獣召喚。」

日本史

『Fクラス 吉井明久

89点

』

明久がそう言うと同時に改造学ランを着て、木刀を装備した召喚獣が現われた。

「何やってんだ？あのバカは。」

そんなクラスメイトの発言すら無視して明久は1歩踏み出した。

「何を企んでいるか知らんがひねり潰せ！！」

「『『『試^{サモン}獣召喚！！』』』」

日本史

『BクラスA

BクラスB

BクラスC

162点

159点

154点

』

まずサーベルを持ったAが直進して明久を狙うが……

『BクラスA

0点

』

横に回避されすれ違いざまに首もと（急所）に木刀を叩きつけられ、消滅する。

「う、嘘だろ……。」

「複数でかかればいけるはずだ！いくぞ！」

今度は双剣を持ったBが右から、ハンマーを持ったCが左から接近するが、

Bが先に仕掛けたところをジャンプで避け、踏み台にしてさらにジャンプし……

『BクラスB

82点
』

思い切り振りかざしたCのハンマーの餌食になる。

「なんで俺を攻撃するんだ！」

「しょうがないだろ！慣れていないんだ！」

『BクラスB BクラスC

0点 0点 』

動きが鈍ったところで一気に片を付ける。

ここまで30秒…。

「さて……………次の相手は誰かな？」

一瞬凍ったように動かなくなるBクラス一同。

「…くっ！こうなったらなり振りかまわねえ！全員で囲んで弱らせろ！―」

「『『『『『試^{サモン}獣召喚！！』』』』』」

『Bクラス×10名

平均160点×10
』

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
〔根本Side〕

「た、大変だ代表!!」

何なんだいったい?こちら冷房が壊れて動かねえってのに暑苦しいな。

「で、何を言いたいんだ?お前は?」

あゝあ喉乾いたな。お、ちょうどここに水が。

ゴクゴク

「Fクラスの吉井に10名ぐらい倒されたんだ!」

ブホッ!!

「冗談言ってんじゃねーよ!アイツは観^{クス}察処分者だぞ!」

「本当だ!現にそいつだけなのに前線部隊が全滅した!中堅部隊も既に壊滅状態なんだ!」

「いくら暇だからってそんな騙されやすい嘘を吐くんじゃねーよ。」

「だから俺でも信じられねえよ！」

ガラッ

「君で廊下に展開していたBクラスの人は最後だよね？」

『BクラスT

0点
』

な……………くっ……………こいつの報告は本当だったらしいな…。

「根本君……………チェックメイトだよ？」

「させるか！近衛部隊！」

ダンッ！ダンッ！

「……………加速。」

保健体育

『Fクラス 土屋康太

482点

VS

Bクラス近衛部隊×6名

0点×6

』

「……………な、何だと……………？」

「君の負けだ。君の全てを失わせてあげるよ。
……………君の精神ごとね。」

スパン！

『Bクラス代表 根本恭二

0点

』

「戦争終結!!」

その宣告が出たがまだ吉井は近づいてくる……

「ひい！」

……お、俺に近づくな化け物が!!

そのまま俺の耳元まで近づき囁いた……。

「
」。

「ぎゃあああああ！！！！」

その言葉の意味は分からなかったが何故か俺を叫ばせた…。

「や、やめてください。明久君！！」

ひ、姫路か…。脅迫した俺を助けてくれるのか？

……だがもう遅い。俺が俺じゃなくなっていく感覚がする。

済まねえな……。許せとは言わねえ……。だからせめて俺のままにしてくれ。

こんな終わり方じゃ格好がつかねえだろうが……。

俺の意識はそこで途切れてしまった……。……。

第10問 明久の本気（後書き）

……この小説って地味にムツツリーニが活躍してるような…。

そんなことはさておき前回予告した通りヒステリアモードについて説明したいと思います（原作と少し違いますが）。

ヒステリアモード（ヒステリア・サヴァン・シンドローム）

性的興奮を感じると思考力・判断力・反射神経などが通常の30倍にまで向上する（明久の場合瑞希のみで発動）。

HSSとも略される。その代わり、女性（瑞希）の事を最優先で考えることで物事の優先順位付けが正しく出来なくなったり女性（明久の場合誰にでも）にキザな言動を取ってしまうなどの反作用がある。

ついでに言うともまだ明久のHSSは完成しておらず、今回のように暴走する時がある。

これは作者が明久が本気になった時の思考力、Fクラスで鍛えられた反射神経が

倍増したらおもしろくなるんじゃない？という思いつきでやっちゃいました。

第11問 暴走と浄化と1つの可能性（前書き）

タイトルが微妙ですが……

第11問どうぞ

第11問 暴走と浄化と1つの可能性

〔瑞希Side〕

「や、やめてください。明久君!」

駄目です!……あの時みたいに自分を見失わないでください!!

「やあ、姫路さん。そんなにあわててどうしたんだい?」

…明久君が笑顔でこちらに話しかけてきます。

騙されちゃいけません!!

「どうしたじゃありませんよ!いくらなんでもこれは酷いです!」

「そんなにカリカリしてるとせつかくの可愛い顔が台無しだよ?」

私の顎をクイツと持ち上げて顔を近づけた状態で明久君は囁きます。

明久君の口から出た甘い言葉に意識を持ってかれそうになりますが
なんとかこらえました。

パチン！！

「ふざけないでください！！いまの明久君に触られたくありません
！！」

いつもなら落ち着くはずの明久君の抱擁も今は不快な物でしかありません。

「これは手厳しいね。」

そんな私のビンタも気に留めず体を抱き寄せ無理矢理キスをしようとします。

……駄目です。いくら人格は違えど明久君の匂いは変わらないので引き離せません。

……でもこんな所で想いが一緒になっても嬉しくなんかありません。

そんなことを考えているうちにあと数cmのところまで唇が接近します……。

覚悟を決めたその時でした……。

「……………正氣に戻れ。明久……………！」

ゴッソッ！！

土屋君の鈍器で明久君を殴った音と共に眼から赤みが解けていく明久君がもたれかかってきます。

私は尻もちをついてしまいますが、しっかり明久君を抱きとめます。

……そこにはさっきまでの不快な気持ちはありませんでした。

.....

〔 明久Side 〕

〔 放課後・保健室 〕

なんだろう………暖かい。

さっきまでの自分が壊れていくような気分が浄化されていく………。

ハッ！

「気づきましたか？明久君？」

気づいたって………あつ！

………たしか根本君が姫路さんを脅している所を見て………（以下略）。

姫路さんにあんな酷いことを………。

「じめん！姫路さん！！」

僕は全身の力を振り絞って謝った。

………許してもらおうなんてバカなことと言わない。

だからせめて嫌わないで………。

君がいないと僕は何もできないから……。

「あの時のように呑み込まれたんですよね……？」

「……うん。」

「ならいつもの明久君に戻ってくれてよかったです。」

え………？

「こんな僕を許してくれるの……？」

「はい。……それと根本君が謝りに来てくれました。この手紙も返してくれました。」

「え？」

「おかしいですよ？あの時の人は全員自分が誰なのか分からなくなるまで精神を滅茶苦茶にされたっていうのに……。」

「それは……。」

「きっと、明久君が止めたんじゃないですか？前と同じことが起こらないようにって……。」

「買いかぶりすぎだって。」

でも姫路さんの声が聞こえた時に一瞬だけ我に返ったのは本当だ……
……なんて言えないよ／＼／

「とにかく、今日のところは帰ろっか、姫路さん。」

「はい。……それとありがとうございます。私を気づかって退がらせてくれて……。」

「そんなの気にしないでいいって。」

「私がお礼を言いたかっただけですよ。」

……駄目だ。この笑顔を見ていると脳がとろけ落ちそうだ。

「それと……はい、明久君から預かっていたネックレスです。」

「ありがとう姫路さん。ここのところ忙しかったから言いだしづらかったんだよ。」

僕はそのネックレスを付けながら言う。

「い、いえ／＼（あそこで笑顔は反則ですよ……）」

なんで姫路さんの顔が赤いんだろう？

その後、姫路さんと一緒に下校した。

第11問 暴走と浄化と1つの可能性（後書き）

明久のヒステリアモードはキンジのより不完全という設定にしたので今のところは別人格ということにしておきました。

第12問 交渉とAクラス戦と再び……（前書き）

第12問どうぞ

第12問 交渉とAクラス戦と再び……

「明久Side」

「みんな！おまえらのおかげでここまで来られた……感謝している。」

「

どういう事だ！？

「雄二が感謝の言葉を言うなんて……明日は核が降って来るじゃ……
ごぶっ！」

「そんなに珍しいのか！……まあ明久の言う通りらしくないがな。」

「

だったら殴らないでほしい。

「……Aクラスに対戦するにあたって作戦がある。」

「作戦？……あ！もしかして昨日Bクラスと設備を交換しなかった
のに関係あるんじゃない？」

「……明久が感づくなんて明日は人類滅亡……いや太陽系全滅か？」

「ちょっと！あきらかに雄二のより酷いじゃないか！」

「明久君、熱はありませんか？」

「ちょ……姫路さんまで……！」

……うつうつ。そんなに珍しいことなのかな……。

「このバカはほつといて本題に入る。AクラスにBクラスを使っておど……もとい脅迫して一騎討ちを申し込む。」

明らかに両方同じ意味だよね……。

「とにかく、交渉に行く。明久、ムッツリ、ニ、秀吉、姫路、島田、ついて来い。」

.....

「雄二Side」

「

へえ？それで私たちに条件を呑めと？」

対応しているのはAクラスの木下優子だ。

「ああ、不満か？」

「ええ、却下よ。姫路さんが居るんだから場合によっては代表も負けちゃうかもしれないし。」

さつきからこれでまるで話が進まない。

.....しょうがない、できればこの手は使いたくなかったんだが.....。

「おい！翔子！」

「はあ？何トチく.....何？雄二？」るって.....ってえ？」

ん？なんかこいつだけじゃなくてAクラス全体から『意外』だという空気が伝わって来るんだが……。

「1対1じゃ駄目らしいから5対5で科目選択権を2：3で勝負し
てくれないか？
もちろんこちらが3でな。」

「……いいけど私との約束覚えている？」

「当たり前だ。泣いても笑ってもこれで決着を着ける（……俺の気
持ちにな）。」

「……うん。あと勝つたら言っ事を聞いてもらう。」

「言われるまでもねえ。……これで交渉成立だな。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
（明久Side）

10：00

「これよりAクラスVS Fクラスの試召戦争を開始します。両者前

に。」

「じゃあウチが一番手ね。」

一回戦は島田さんだ。

「じゃあ、あたしが出るわ。」

「Fクラスをなめない方がいいわよ。数学だけならウチはBクラス並みの

学力を持っているんだから！試獣^{サモン}召喚！！」

数学

『Fクラス 島田美波

172点』

「あら、すごいんですね。……………試獣^{サモン}召喚！！」

数学

『Aクラス 木下優子

332点』

「もちろん、あたしはAクラス並みですけどね。」

数学

『Fクラス 島田美波

0点
』

「そ、そんな…。」

あゝあ、負けちゃた。

……でもこういう時はあまり話しかけない方がいいだろう。

「次はムツツリーニ、頼んだぞ。」

「……………（コクリ）」

お、次はムツツリーニの番か。

「ねえ？君がムツツリーニ君だよな？」

「……………そんな事実はない。」

「ふ〜ん！噂どおりだねえ。……………ボクで良かったら保健体育の実習をしてあげようか？」

「……………（ブシュウウウウウウー！）」

「ム、ムツリ〜ニ！……………なんて酷いことをするんだ！！」

「ちょっとからかったただけだって。……………それとも君が代わりにやる？」

ドクン！

くっ！駄目だ！！円周率を思い出せば……………

$\pi \approx 3.14$ ……………出てこない。

「駄目です！明久君にそんなことさせません！！（抱きつ）」

そう言いながら姫路さんが僕の背中に抱きつく。

ひ、姫路さん／＼助けてくれるのは嬉しいんだけど……む、胸が……。

ドクン！ドクン！ドクン！ドクン！ドクン！

前と同じ感覚だ……。

……でも怒りは無い。これならいける！

「……………2回戦を入れ替えてくれないかな？」

「む。ボクは別にいいよ。」

「……………明久君。」

「心配しなくて良いんだよ瑞希ちゃん。前みたいなのは起こさない。」

僕は姫路さんの腰を抱き寄せ、唇に指を当てながら言う。

「……は、はい／＼／（……そ、その名前で呼ばれるのは恥ずかしいです）。」

「さあ、見せてあげるよ。僕の本気を……試獣召喚^{サモン}。」

僕はウインクしながら宣言する。

「試獣召喚^{サモン}です。」

物理

『Fクラス 吉井明久

72点

VS

Aクラス 佐藤美穂

398点

』

第12問 交渉とAクラス戦と再び……（後書き）

やっちゃったZE

自分で書いてて明久に酔いそうになってしまったWW

感想お待ちしています。

第13問 僕の本気とヒステリアモード（前書き）

戦闘描写は基本「」の召喚獣が」という描写じゃなくて「」が」という描写にしたいと思います。

では第13問どうぞ

第13問 僕の本気とヒステリアモード

〔NOSide〕

明久の召喚獣は木刀、対する美穂は鎖でつないだ二丁の鎌。

「はあ！」

最初に動いたのは美穂、鎌を交差させながら接近してくる。

「甘いよ！」

それに対し明久は木刀を横にして防御の体勢をとる。

「この点数差なら防御したって……！」

そして斬り結ぶ………はずだった鎌は空振りし、気付いた時には

横に回避した明久が美穂の手首を目掛けて突いていた。

物理

『Aクラス 佐藤美穂

372点

』

「くっ。」

ダメージは大したことは無かったが片腕の鎌が落ちてしまう……………。

当然鎖でつないであるのだから片腕だけで二丁の鎌を持った美穂は動きが鈍くなる。

「今だ！」

その瞬間を狙い明久は喉元、脳天、防具が無い箇所を集中的に5、6発突く。

物理

『Aクラス 佐藤美穂

232点 』

「さすがだね。Bクラス程度なら一撃で沈められるのに。」

これだけやってもまだ点数差は3倍もある。

一旦距離をとった美穂はそのまま片腕で鎖でつないだ鎌を振りまわし再び接近する。

.....
（雄二Side）

すげえな、明久の奴。いつもならギャグパートに入ってスタスタにされるオチなんだが……。

しかし気は抜けねえな。100点代に入るまでは相手の攻撃をかす
らせた
だけで即戦死するだろう。

……そういや明久の様子が変だな。

あのBクラス戦の時のような気持ち悪さが漂ってやがる。

……姫路はその明久にデレまくっているが……。

……………

〔瑞希Side〕

明久君の体温、明久君の匂い、明久君の汗、明久君の息……………

はっ／／／

少し気を失ってました……。

それにしてもいつもの明久君じゃないですけど

冷酷さが無いこっちの明久君も好きになっちゃいそうです／／／

普段の明久君ならこうして触れ合う事は出来ないですけど

今ならこうして近くに明久君を感じられます／／／

でも何か違います。本当なら普段のバカだけど優しい明久君に

抱きしめられたいの……（明久のヒステリアモードの反作用を一部変えられて知っている）。

仕方無いですね……。明久君は私なんか好きじゃないはずですか……。

明久君の優しさに甘えている自分が憎いです。

……………

（明久Side）

姫路さんの体温、姫路さんの匂い、姫路さんの胸、姫路さんの汗、
姫路さんの息……

はっ／＼／

あ、危なかった……。あと少しで攻撃が当たるところだったよ。

いつもと違って相手の動きがスローに見えるのは良いんだけど
感覚が鋭くなっているから鳩尾辺りにある姫路さんのむ、胸が……。

それにしても姫路さんは大丈夫かな……？

こんな好きでも無い男に抱かれて……（ちなみに明久は反作用で本能的に離せない）。

でも今なら分かる……。姫路さんは嫌がって無い。
……僕の夢い幻想かもしれないけど……。

それより今は戦闘に集中しよう！！

鎌を振りまわした相手が攻撃に対し木刀で鎖を絡め取り
動きを封じる。

くっ！木刀が折れそうだ。

そのまま鎖を地面に叩きつけ鎖を断ち切る。

……木刀は折れてしまったけど。

それに構わず鎌を振りかざしてくる相手の攻撃を
ギリギリで回避すると鎖を斬った方の鎌を拾う。

そしてその鎌で横からすくい上げるように斬る！

物理

『Aクラス 佐藤美穂

152点

』

おお！さっきとは減り方がまるで違う。

そのまま正面からぶつかり斬り結ぶ。

物理

『Fクラス 吉井明久

69点

Aクラス 佐藤美穂

149点

』

よし！斬り結んだ反動で相手の動きが鈍った！
僕ならこれでも動ける！

「これで終わりだああ！！！」

思いつきり鎌を投げ相手に一直線に飛ぶ。
これで倒せる……………はずだった。

物理

『Aクラス 佐藤美穂

「だいぶ点が減っちゃいましたけど操作のコツがだいたいつかめてきましたよ。」

な、あの一瞬で防御の姿勢をとったのか……。

……勝負を無駄に長引かせるべきじゃなかったか。

「仕方がないね。君は僕の本気で沈められた一人目にしてあげるよ。」

「……え？」

「実は僕……」

……左利きなんだ。」

……空気が一瞬凍る。

今だ！

僕はさっき折ってしまった木刀を拾い突きの体勢で相手に接近する。

「うおおおおお！！！！」

「はあああああ！！！！」

相手も構えをとり接近する。

そして鎌が僕に向かって振り下ろされる直前で相手の手首を持ち、背負い投げの要領で投げる。

物理

『Aクラス 佐藤美穂

67点

』

そのまま折れた木刀で突こうとするけど最後の抵抗と言わんばかりに鎌を突き付けてくる。

「今更その程度の攻撃なんて痛くもかゆくもないよ。」

物理

『Fクラス 吉井明久

42点

』

鎌がかすめたけど構わず相手の脳天目掛けて折れた木刀を突きさした……。

物理

『Aクラス 佐藤美穂

0点

』

「え、Fクラス吉井君の勝利です。」

高橋先生が信じられないとばかりに宣言する。

ふう、疲れたな……。

僕はそのまま倒れこむ……………。

「きゃっ！」

あ……………。

そのまま姫路さんを巻き込み気を失ってしまった。

第13問 僕の本気とヒステリアモード（後書き）

ふう……。疲れてしまいました。

ほとんど戦闘描写だったので少し甘さを足してみました。

感想お待ちしています。

第14問 愛する者のために・・・（前書き）

すみません！

ちよつとパソコンの調子が悪くて投稿出来ませんでした。

第14問どうぞっ！

第14問 愛する者のために・・・

〔NOSide〕

「それでは、さっきとばした2回戦を始めます。両者前へ。」

高橋女史がそう言つとFクラス側から康太、
Aクラス側から愛子が出てきた。

「じゃあ気を取り直して始めようね。ムッッリーニ君。」

さっきの結果に動揺しておらず堂々している愛子に対し

「……………（ダラダラ）。」

……康太は鼻血に沈んでいた。

どうやら止血が間に合わなかったらしい。

「ム、ムツッリーニ君!？」

愛子が近づく。しかし……

「……………お、俺に触るな（ブシュウウウ）。」

逆効果だった。

『そ、そんなことをしたらムツッリーニが……………』

『やめてくれ!ムツッリーニが死んだら俺は……………（明瑞グッズが買えないじゃないか）。』

『駄目だ!ムツッリーニはまだやらくなくちゃいけないことがあるん

だ！（明瑞の写真を撮る事）」

「……（ムツツリ―二君ってクラスの人に慕われているんだ）。」

欲望に忠実なだけである。

「えゝ。Fクラスの土屋君が戦闘不能なのでAクラス側の勝利です。」

「……んしょ、……んしょ。」

「……………な、何をする工藤愛子（ダラダラ）。」

「なにつて肩を貸してあげてるだけだけど？」

「……………じ、自分で逝け……る（ブシュウウウ）。」

「ムツツリーニ君！？（字が違ったよね……………）」

……………
瑞希Side

「はわわっ！……………あ、あ、明久君！？」

勝負がついたと思ったら電池が切れたように倒れこんで……………

そ、その、押し倒されている状態に……………

あ、明久君の顔が近いです……………。

「取り込み中悪いが次は姫路の番だぞ。」

「さ、坂本君！」

……恥ずかしいです。あんな所を……。

「言つとくがここにいる全員が見てたぞ。」

「ふえ？」

不思議に思つて周りを見渡してみます。

FクラスはもちろんAクラスの人まで……。

「テンパるな。とにかく出番だから行つて来い。」

「はっ、はい！」

「遅いじゃないか。待ちくたびれたよ。」

「す、すみません。」

「高橋先生。総合科目でお願いします。」

「では4回戦始めてください。」

「サモン試獣召喚。」

「サモン試獣召喚です！」

総合科目

『Fクラス 姫路瑞希

4771点

Aクラス 久保利光

3997点

』

一瞬で勝負がついた。

「勝者Fクラス姫路瑞希。」

高橋先生がそう告げます。

「いったい、いつの間にこんな実力を……」

「私、決めたんです」

信じられないと言いたげな久保君に言います。

「決めた？」

「はい。頑張ってみようって決めたんです。私の好きなFクラスのために頑張ろうって」

「Fクラスが好き？」

疑問に思う気持ちは分かります。……でも

「暖かくて優しくて、なによりもみんな、誰かのために想って行動できるいい人ばかりです」

「そうなんだ……。」

「それに……私のためにこの戦争を起こしてくれた明久君のためにもって頑張ったんです。」

恥ずかしいですけど、言いきります。

……これくらい言っても明久君に距離を取られることはありませんよね……？

「……僕が負けたのは当然だね。……僕も姫路さんの恋、応援させてくれるかな？」

「ふえ？」

待ってください……………

私の恋を応援してくれる

←

私が恋してるのは明久君

←

私の恋心がばれている……

「ちよっ！待ってください！……ち、違わないんですけど違うんですっ！」

そんなことを明久君にばれたら嫌われてしまいます！

「気にすること無いって、吉井君と頑張ってくれたまえ。」

全然気にしますよ！！

そのまま久保君はAクラス側に行ってしまった……。

く雄＝Sideく

よし……俺の番だ……。

「翔子！！決着をつけるぞ！」

「……………うん。泣いても笑ってもこれで終わり。」

「高橋女史。教科は日本史それも小学生程度の上限ありだ。」

「分かりました。テストを用意しますので別室に移動してください。

」

俺は今まで翔子の俺に対する気持ちを『勘違い』と逃げ続けた……。

だから不良だってやったしバカになったりした……。

……でも春休みの時、翔子は今までの事が無かったかのように接してくれた。

いや……翔子にとって俺が不良になろうがバカになろうがどうでもいいんだ。

……翔子は俺を……どんな俺でも好きになってしまったんだから……。

だから俺なりのやり方で自分の想いに決着をつける。

……今まで待たせて済まなかったな……

……翔子

第14問 愛する者のために・・・（後書き）

ゆ、雄二がらしくない！！

明「そくだよ！雄二がキモい！」

雄「うつせえ！」

まあ、自分の気持ちに正直になったことで良いんじゃない？

時間があったらもう一話更新したいと思います。

第15問 俺の過ちと最後のチャンス（前書き）

いや〜（汗）。雄二がらしくなすぎました。

雄二って明久に似てますよね？

明久に影響されたのか、それとももともとそうだから仲が良いのか。

では第15問どうぞ〜

第15問 俺の過ちと最後のチャンス

く雄二Sideく

「では、始めてください。」

俺は問題用紙を裏返した。

<次の（ ）に正しい年号を記入しなさい>

（ ）年 平城京に遷都

（ ）年 平安京に遷都

これで俺の想いが試される。

来てくれ！『大化の改新』

・・・・・・・・・・・・・・・・

く瑞希Sideく

始まりましたか……。

『そう言えばさ、同点の場合どうなるんだ？』

『その可能性は忘れていたな。』

『まあ、小学校程度の問題だし100点だろうな』

『引き分けだったら延長戦じゃないのか?』

「勝つ方法ならありますよ。」

一気にFクラスみんなの視線が集まります。

「前に坂本君から聞いたんですけど翔子ちゃんとは幼馴染で、昔に間違えて

『大化の改新・625年』と教えてもらったと聞きました。」

『そ、それじゃあ勝てるのか。』

『ああ、俺たちは最強になるんだ』

でも………

「でも、雄二も間違った答えを書くと思うよ。」

あ、明久君？

・・・・・・・・・・・・・・・・

（明久Side）

「でも、雄二も間違った答えを書くと思うよ。」

「明久君、気付いたんですね。」

「うん、それよりさっきの続きだけど……。」

「あ、はいどうぞ。」

僕は気を取り直してFクラスのみんなに向かって言う。

「うん、雄二も間違いなく不正解の答えを書く。」

『どうしてそんなことが言えるんだ？』

『そうだが、どこにそんな根拠が…』

「雄二は神童だったところに霧島さんがいじめられてるのを庇っただけど、それでもいじめられているのを見てすぐに動けなかった事を後悔していたんだ。」

一気に空気が重くなる。
でも構わない続ける。

「それで、霧島さんに好意を向けられても自分にはその資格は無いって思っていたみたいなんだ。」

『そ、それで坂本は悪鬼羅刹に…』

「でも、春休みに久しぶりに向き合って気付いたんだってさ。自分が好かれているのはその事件だけが原因じゃない、そんなこと関係無しに初めから心が惹かれていたんだって。」

『でもなんでわざわざこの機会を使っただけなんだ？』

『そうだな。坂本の結論からみて俺たちFFF団が認めてやってもいい神聖な関係だと思うが…』

「……6年だよ。その事があったのは小学5年生の時……それから6年だ。」

雄二が待たせた分、盛大に迎えに行きたいってさ。全く……どこの王子様だよって感じたよね。」

ホントそうだよ……。

だから、ちゃんと迎えに行つて来なよ。

みんな
Fクラスもそれを応援しているんだから。

雄 Side

（ ）年 鎌倉幕府設立

() 年 大化の改新

あつた！

これでやっとお前に素直になれるんだ。

ああ、これが最後のチャンスだ。

俺は迷うことなく答えを書いた。

「では結果を発表します。」

日本史 限定テスト 100点満点
『Aクラス 霧島翔子

97点

VS

Fクラス 坂本雄二

97点

『

その瞬間を待っていたんだ……。

第15問 俺の過ちと最後のチャンス（後書き）

あと1話くらい雄二中心になると思います。

作者は明瑞だけじゃなく雄二×翔子も好きなので……。

次章は清涼祭ですがどっちターンにしようかな？

いや……いつそのこと両方でいいですかね？

でも欲張ると字数が……。

まあその時に考えましょうか。

意見を書いてくださると助かります。

第16問 和平交渉と踏み出した一歩（前書き）

期末テストが近いのでしばらく更新が遅くなると思います。

では第16問どうぞ～

第16問 和平交渉と踏み出した一歩

〈明久Side〉

『只今の勝負は引き分けです』

やってくれたね……雄二！

『ちょ……Fクラス相手にここまで……。』

『甘く見ていた俺たちが馬鹿だった……。』

Aクラスがざわつき始めた。

当然だね、FクラスがAクラス相手にここまでやったんだから。

…でも実質Fクラスの勝利だ。

説明？……雄二がしてくれるよ。

ち、違うからね！僕が理解出来ないから言えんいんじゃないんだからね！

……虚しいね。

『それでは、代表者同士で勝敗のつけ方を話し合ってください。』

さて、これからが重要だね。

.....
（雄二Side）

「俺たちFクラスは条件付きの和平交渉を要求する。」

「嫌よ！まだ私たちは戦える。」

やっぱ木下姉が納得しねえか…。

「戦えても勝てる勝負じゃないってことくらい気付けよ。」

「勝てないのはFクラスの方でしょ！」

「じゃあAクラスの主戦力の点数を言ってみる。」

「何言ってるのよ、みんな総合で4000点前後よ。」

「違うな、勝負の結果で戦死したのは俺たちは島田だけだ。それに対してお前らAクラスは佐藤と久保が戦死している。」

「そのくらいカバー出来るわよ。」

「そして、姫路の点数は4500点以上残っている。代表である翔子を倒すには十分だ。」

「それでも互角のはずよ。そう簡単にはいかないわ!」

「……優子、私の点数は瑞希程無い。」

「え?」

「そうだぞ、さっき日本史のテストを受けたからな。」

そう、最後に受けたテストが召喚獣の点数になる……

つまりさっきのテストで翔子は400点近く落ちているんだ。

「でも、総合2000点前後の人が40名残っているからあなたたち相手に負けるはず無いわ!」

「Bクラス戦の時の事、噂で聞いていないのか?」

「はあ? いちいち下位クラスの試召戦争なんて見ると思ってるの!」

「姫路の隣にいるバカ…もとい吉井明久がBクラス30名余りを単独で戦死させたんだ。」

「ふざけないで！そんな出鱈目信じるわけないでしょ！」

「さっきの佐藤との勝負を見ても…か？」

「うつ…。」

「そりゃ、6、7倍点数差あったのにほとんど無傷で勝ったからな。信じるしかないだろう。」

「つまり、こちらのカードは姫路、明久、ムツツリーニに対してAクラスの主戦力でともに戦えるのはお前と工藤だけだ。当然工藤はムツツリーニと一騎打ちになり、もし工藤が勝っても戦力にならないだろうし、姫路相手にお前は勝つことが出来るのか？」

「……優子、私たちの負け。条件に従って和平すべき。」

「わ、わかったわよ…。」

「退いてくれたようだな。」

「それじゃあ、俺たちの条件だが……Aクラスと定期的に勉強会と模擬試合戦争をやることだ。文句はないだろう？」

「……無い。」

「それじゃあ、和平成立だ。」

「……うん。」

「それと、翔子。」

「……何？」

さあ、言うんだ！今しかねえじゃねえか！

「今まで済まなかった。」

「……急にどうしたの？雄二。」

「いや、言わないと次に進めないと思ってな……。」

そうだ、まずは謝らないと先に進めない。

……… 6年も待たせてしまったんだから。

「翔子………。」

俺は翔子の眼を見て言葉を放った。

「……好きだ！付き合ってくれ！」

翔子の眼に涙が浮かんでいるのがはつきりみえた。

第16問 和平交渉と踏み出した一歩（後書き）

うーん…急ぎすぎましたかね？

まあ、雄翔はここでくつつけとかないとグランドパークまで機会がありませんし…………。

次回で試召戦争編は終わりだと思います。

それと清涼祭編の試召大会のコンビを決めたいので次の中から投票お願いします。

？やっぱベタに…明久と瑞希

？いやいやここは原作通り…明久と雄二

？他にもあるぜ…その他

では次回もよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8725x/>

バカとテストと召喚獣～太陽の騎士と月光の姫～

2011年11月8日22時03分発行